

本号の岩手医大歯学会雑誌から

この頁は……

本号に掲載されている論文の内容を手っとり早く把握して頂き、歯科臨床との関わりを紹介する頁です。各論文の指導教授あるいは、これに準じる方に紹介の労をとっていただきました。本号のもう一つの目次として御利用下さい。

ガリウム合金の走査型電子顕微鏡および X線微小部分分析による金属組織学的研究

中 島 薫 他3名

近年、水銀を含まない金属成形修復材料としてガリウム合金修復材料が臨床に使用されている。本研究は、Gallium alloy GF® 硬化物の元素分布状態を検索した基礎的研究である。SEMより、core、core-matrix、matrix部の3層構造を認めた。EPMAにより、coreはAg, Cu, Sn, Pdよりなる未反応合金粒子相と推測された。matrixはSn, Ag, In, Gaよりなり、大部分をAg-In相とSn単体相が占め、このSn単体相は腐食に重大な影響を与えると推測される。core-matrixはGa, Cu, Pd, Sn, Agよりなり、Cu-Ga相、Pd-Ga相、Ag-Ga相が存在していた。(本号76頁)(久保田 稔 記)

Duchenne型筋ジストロフィー症患者の顎関節形態 および下顎骨形態に関する研究

金 野 吉 晃 他5名

Duchenne型筋ジストロフィー症患者では、発達期早い時期から全身にわたる筋機能の低下が認められ、その影響は顎顔面領域にも及んでいる。本研究はとくに下顎骨と顎関節の形態的不調和が認められること、下顎頭の前方屈曲が少ないことなど、咀嚼筋機能の低下によると思われる所見が認められ、機能低下が形態に与える影響を解明する糸口となると思われる。(本号82頁)(石川 富士郎 記)

舌動脈の共同幹起始についてのX線解剖学的研究

藤 村 朗 他10名

血管の走行を正しく理解することは、口腔外科領域における治療および手術に際し、非常に重要である。舌動脈の共同幹起始は比較的出現頻度の高い変異であるが、長い共同幹を有する舌・顔面動脈幹の場合にはその走行経路が顔面動脈の経路をたどる。さらに、舌動脈と顔面動脈の両者が外頸動脈からの分岐位置を逆転した場合にも、顔面動脈、舌動脈は本来の走行経路を維持している。これらのことから、血管走行の本来の位置と周囲組織との関係を理解していれば、共同幹や分岐異常にも充分対応が可能と思われる。(本号92頁)(野坂 洋一郎 記)

◆ ◆ ◆
内容液のアミラーゼ定量分析を行った口底部類皮嚢胞の一例

中山 温 史 他 4 名

口底部に発現する類皮嚢胞は、被覆粘膜が正常色を呈し、また弾力性のある腫瘤として触知され、さらに豆腐カス状の内容物を有することが一般的である。本例は弾性軟で、波動が触れ、内容液が認められたので、ガン腫との臨床的鑑別を要した。そこで、内容液のアミラーゼ定量分析を行った結果、その値は 100 IU/l とガン腫のそれに比べ、明らかに低かった。また、病理組織学的には、ほぼ典型的な類皮嚢胞の像を呈していた。このように、口底部の類皮嚢胞と舌下顎下型ガン腫との臨床的鑑別を要する際には、操作の容易なアミラーゼ定量分析がきわめて有用である。(本号 102 頁) (工藤 啓吾 記)